



薄月しぐれ

ターレットファイター

夕空あすかにとって、薄月しぐれとは大いなる謎である。

「お姉ちゃんお姉ちゃん、このまえ学校でね——」
「うんうん」

学校でのことや級友のことを喋り続ける薄月しぐれに適当に相槌を打ちながら、夕空は目だけで周囲の様子を窺う。帰宅ラッシュ目前、オフィスに戻る営業職と思しき会社員が目立つ地下鉄の車内には脅威となるような人間は見当たらなかった。

「それでね、美唄さんが——」
「うんうん」

薄月は相変わらず、とにかく話していること自身が楽しそうな様子でよくもこれだけ話題が付きないうものだ、と呆れそうになるほど延々と話し続けている。とはいえ、それは別に今に始まったことではない。薄月しぐれが夕空あすかとともに行動するようになってから、そして姉妹という表向きの仮面を付けるようになって以来移動時はいつもこうだった。

「そういえばお姉ちゃん、ここの近くのパンケーキ屋さんがとってもおいしんですって！」

「へえ……でも、お高いんでしょう？」

「それがね、なんといまなら割引クーポンがあるんです！
もらったんです！」

乗り換えのため電車を降り、別な路線への通路を歩く間にも薄月は楽しそうに話し続け、夕空はそつと周囲を窺い続ける。早々に退社したサラリーマンとまだ仕事が続くサラリーマン、そろそろ家路につく学生、旅行者など様々な人間が行き交うなかに一人、明らかに異なる雰囲気の間人がいた。通路の向かい側、サラリーマン然とした格好、いかにもこれから会社に戻るといった雰囲気どちらへと歩いてきている男。しかし、歩きながら人を探しているその目つきは帰社するサラリーマンのそれではない。

「そうね……せつかくだし、晩ごはんにする？」
「やったあ！ いいんですか？」

「せつかくだし……それに、給料日後だから」

会話を続けながら夕空がさり気なく、サラリーマン風のその男の方へと進路を変える。

「じゃあ張り切っていちばんおいしそうなメニューを頼んじゃいますね！」

薄月も自然な様子で、夕空にあわせて進路を変える。人波をさりげない調子でかわしながら、ふたりは男の進む先へと向かっていく。

男は相変わらず、誰かを探すような調子で視線を巡らせながら近づいてくる。一瞬だけ、その視線が薄月と夕空に向けられた。

「いちばん高いメニユーがすなわちいちばんおいしいメニユーではないからね」

「はいー！」

すれ違う瞬間、薄月の手が男のスーツのポケットに伸びた。周囲の死角を熟知した一瞬の動き。そのまま、男はなにこともなかったように、周囲をきよろきよろと見回しながら歩み去っていく。

「それにしても、割引券があるんだったらクラスメートと行けばいいんじゃない？」

「すぐに有効期限が切れちゃうんですよ。だからかほら、行きましようー！」

「そう急かさなくても行くわよ……」

夕空は薄月に引つ張られるように手近な出口へと向かう。手近な出口は、地上へ直通するエレベーターだった。無人のエレベーターに乗り込むと、薄月は男のスーツから掠め取った封書をさりげない調子で開けた。

「どんなお手紙だった？」

「新しい任務の伝達です。夕空監理官」

柔らかな口調で尋ねた夕空に、薄月は数秒前までの今にも跳ねだしそうな様子が微塵も感じられない、冷たい口調で応じる。エレベーターに乗り込むときに、別人に変わってしまったような様子だった。

「車を用意してあるそうです」

薄月がそう言って夕空の手にキーを握らせると同時に、エレベーターの扉が開く。

「お姉ちゃんお姉ちゃん、こんどは別なパンケーキ屋さんも行って食べ比べしたいですねー！」

「そう……そうね。それならお昼から行って、ちよつとづつ注文するのがいいんじゃないかしら」

コンコースにいたときにはしゃぎながら、しかしたつぷりと食べたあとの気だるげさを漂わせる薄月に、一瞬反応が遅れながら夕空は頷く。薄月が車道の端に止められたバステルカラーの軽乗用車に近づく。

「じゃあこんどのお休みの日に来ましようー！」

「それはちよつと早すぎやしないかしら……」

夕空がロックを解除すると、「いいんですいいんです！明日でも行きたいくらいです！」とはしゃぎながら車の後部座席に乗り込む。

車道側に回り、運転席に収まると夕空は流れるように車を発進させる。夕空がルームミラーに目を向けると、氷のように冷たい目つきの薄月しぐれがそこにいた。

数秒前の様子からぶつりと切り離されたような姿。人の目があるところでの「姉に懐いている妹」としての姿、そして人の目のないところでの部下としての薄月の姿。さら

に、ほんの数十分前に薄月は絞殺でふたりを、撲殺で一人を殺害している。しかし、殺人を犯したという緊張感や動揺のたぐいは一切薄月からは見られなかった。

スイッチを切り替えたように一瞬で顔を使い分け、さらに高揚や動揺もなくただ淡々と機械のように人を殺す。倍近く生きてきて、さらにこの仕事も長い夕空でもここまですべて徹底して行うことはできない行為を、薄月しぐれは当然のこのようにやっていた。

しかも、薄月しぐれはプライベートな場でもその顔の使い分けをし続けている。年齢十五の少女であることを考えれば、ほとんど異様としか言いようがない完全に「自己」を消し去った姿。

だからこそ、夕空あすかにとって薄月しぐれとは大いなる謎である。

気分を切り替えるようにいったん深呼吸をしたあと、薄月しぐれの上司である夕空あすか監理官としての口調に切り替えて夕空が尋ねる。

「任務の内容は？」

それに応じる薄月の口調は研ぎ澄ました刃のように冷たく、感情のかけらも見当たらなかった。

「金銭の奪取です」

薄月しぐれ

発行日 : 2019年8月26日

著者 : ターレットファイター

本文書の無断複製・無断複写を禁じます。
